

## 『栄花物語』〈男の心〉考

「男の御心こそなほ憂きものはあれ」

桜井宏徳

## 一 『栄花物語』、その恋愛文学としての可能性

事新しく述べ立てるまでもなく、『栄花物語』は仮名文の歴史叙述である歴史物語の嚆矢である。そのことじたいに異論はないけれども、歴史物語というジャンルと術語は、近代に入ってからようやく確立されたものに過ぎず<sup>1</sup>、『栄花物語』が当初から歴史叙述として構想されていたか否かについては、なお議論の余地が残る<sup>2</sup>。また、『栄花物語』は語りの方法こそ作り物語のそれに拠っており、その点ではまぎれもなく物語文学ではあるものの、作り物語のみならず、仮名日記や私家集など、それまでのさまざまな女性表現の手法を貪欲なまでに取り込みつつ集大成しており、仮名文の歴史叙述——歴史物語というジャンルの枠組みには収まりきらない文学テクストとしての多様性と可能性を有している。

本稿は、右のような観点から、従来はほとんど顧みられたことのない『栄花物語』の恋愛文学としての一面について、〈男の心〉という表現を手がかりとして考察を試みるものである。もとより、必ずしも恋愛を主題としているわけではない『栄花物語』に、

秋山虔氏が『源氏物語』について「恋愛の不可能を極限的に追求した恋愛文学、いいかえればそれへの断念を語り尽くすことによって恋愛の本質を照らし出した稀有の物語」と述べていたような深度を求めることは不可能であろうが、かつて岩野祐吉氏が「かなしくあはれな物語」と評し<sup>6</sup>、また加納重文氏がその基調として「情趣性」を看取していた『栄花物語』は、恋愛における男女の心の機微にもけっして鈍感ではない。『栄花物語』は、「をかしくめでたきよのありさまども」(巻第一「月の宴」①三九頁)<sup>8</sup>「世中のゆきかはり、人の御さいはいなど、むかしものがたりのやうなる事ども」(巻第三十六「根あはせ」③三九八頁)を書こうとする意思をみずから明示しているが、それらの中に恋愛の話題が含まれていることは、『栄花物語』自身が言及している「むかしものがたり」の伝統に照らしても、何ら不自然ではあるまい。

近時、横溝博氏は、「女房日記では、讃仰の対象として、幾分の距離をもって記されるのみであった天皇や后たちが、『栄花物語』においては作り物語と同様の喜怒哀楽を備えた一人の人間として登場し、描き出されるのである」<sup>9</sup>『栄花物語』の特徴は、帝や后を物

語の登場人物として扱い、遠慮会釈なくその心中を語り出していくところにある」と指摘しているが、あらかじめ見通しのみを示しておけば、そのような『栄花物語』の特徴<sup>9)</sup>は、恋愛の描写においても遺憾なく発揮されているものと目されるのである。

また、木村朗子氏が、藤原撰関家の歴史が仮名文の物語というかたちで書かれた理由を推察する中で、「男女の情事など漢文日記に記録されることはおよそなかったのだから、閨事で天皇の系にじり寄っていく過程などは、恋物語として描くほかなかったのかもしいれない」と述べていることも、「後宮史」の物語<sup>10)</sup>とも評される『栄花物語』において恋愛の描写が持つ意味を考える上で示唆に富む。本稿で取り上げる〈男の心〉をめぐっても、その〈心〉を問われる〈男〉たちは、天皇や撰関家の御曹司といった貴顕であり、彼らの恋愛は、多かれ少なかれ政治的な意味合いを持たざるを得ないはずである。しかし、以下に見てゆくように、『栄花物語』はそうした政治的な文脈とは距離を置き、より普遍的な〈男〉として彼らをクローズアップし、その〈心〉のありようを問うてゆくのである。

## 二 『栄花物語』における〈男の心〉

はじめに、『栄花物語』に四例が見出される〈男の心〉の用例を、前後の文章とともに掲出しておく。

A かくいみじうあはれなる事を、うち（＝村上天皇）にもまじ、ろになげきすぐせ給ほどに、おとこの御こ、ろこそなをうきものはあれ、六月つごもりに、みかど（＝村上天皇）のおほし

めしけるやう、「式部卿の宮（＝重明親王）のきたのかた（＝登子）は、ひとりをはすらんかし」とおほしいで、「御文もせさせたまふに、後の宮（＝安子）の御おと、の（御）かた、おとこぎみたち、たゞおやともきみとも宮をこそたのみ申つるに、ひをうちけちたるやうなるを、あはれにおほしまどふ。」（巻第一「月の宴」①四九頁）

B おとゞ（＝重信）、御としなどおい給にたるに、この三位の中將（＝隆家）の御事をいみじきことにおほして、よざりは夜中ばかりにおはするにも、われはおほとのごもらで、よろづをまつりごち給も、あはれにいみじき御心ざしを、この中將のきみゆめにおほしたらず、かげまさの大進のむすめをいみじきものにおほいて、このひめきみ（＝重信女）の御ために、いみじうおろかにおはすれば、関白殿（＝道隆）、いとかたはらいたうかたじけなき事にのたまはずれど、おとこの心（＝御心甲乙学）はいふかひなげなり。

（巻第四「みはてぬゆめ」①二〇〇頁）

【凡例】甲＝富岡甲本 乙＝富岡乙本 学＝学習院本

C かの大将どの（＝頼通）は、「さてもいかななりしことゞもにか」とおほされて、たゞならましよりは、いみじうくちをしようおほさるべし。それをもとこの御心のにきなるべし。

（巻第十二「たまのむらぎく」②六四頁）

D ほりかはの女御どの（＝延子）は、たゞ「いつまでぐさの」とのみ、あはれに物をおほしてあかしくらし給。院（＝小一条院

（敦明親王）も、をろかならずおぼしきこえさせ給事も、しばしこそあれ、おとこの御心、やう／＼月ひごろへだ、りゆくままには、うとくこそなりまさらせ給へ、「いまはいかゞ」とのみみえさせ給を、……（巻第十四「あさみどり」②一六六頁）

右のように、用例はすべてが正編に集中しており、また、Bを除く三例は接頭語「御」を伴って「男の御心」となっているが、松村博司氏の『栄花物語の研究 校異篇』及び学習院本の紙焼写真によつて検した限りでは、Bに「御」の有無をめぐる軽微な異同が見られる程度であり、（男の心」という連語そのものが成り立たなくなるような異同は見出されない。

四例という（男の心）の用例数は、さほど多いとはいえないようにも思われるが、後述するように、『栄花物語』の以前以後の物語文学では、『源氏物語』にさえ一例も見られないのははじめとして、用例はごく稀であり、その点に鑑みれば、少なくとも平安時代の物語文学史上においては、（男の心）なるものに着目しているのは『栄花物語』のみと見て誤らないようである。フィクションの作り物語ではなく、また、一般には恋愛や結婚に関わる男女関係を大きく扱っているとはみなされていない『栄花物語』が（男の心）に関心を寄せていることは意想外にも思われようが、それゆえにこそ、ここに『栄花物語』の恋愛文学としての一面を考えるための鍵が存するのだといえようか。

前掲のA～Dにおける（男の心）の用例については、第四節であらためて詳細に検討を加えるが、ここではまず、それぞれの場面に

ついで概観しておくことにしたい。

Aは、糟糠の妻である中宮安子の崩御後、村上天皇が、安子の生前から並々ならぬ関心を寄せ、事もあろうに安子その人に手引きを頼んでさえいた、安子の同母妹で、天皇の異母兄重明親王の未亡人でもある登子に懸想文を送る場面である。ここでは、道ならぬ恋に踏み出そうとする村上天皇の振る舞いが、「おとこの御こゝろ」が「うきもの」であることを証する出来事として、厳しく非難されている。

続くBは、藤原隆家と右大臣源重信女との結婚をめぐる一節である。重信が老身をも顧みずに、女婿として迎えた隆家を献身的に厚遇しているにもかかわらず、隆家は家格では重信女にはるかに劣る藤原景齊女を溺愛し、父道隆の諫めも聞き入れずに、正妻として重んじるべき重信女を粗略に扱っている。そうした「おとこの心」は「いふかひなげ」——どうしようもない様子である、と語り手は評する。

次のCは、道長の嫡男頼通の縁談に関する話題である。頼通は、具平親王女の隆姫女王を正妻に迎え、深く愛していたが、道長との融和を図る三条天皇の意向によつて、天皇の女二の宮である禊子内親王との縁談が持ち上がる。この縁談は、『栄花物語』の語るところによれば、具平親王のもののが現れたり、隆姫女王の乳母の祈願によつて貴船明神が頼通を病づかせたりしたために沙汰止みとなったが、降嫁が実現しなかったことを頼通が「いみじうちをし」と思っているらしいことについて、語り手は「を」とこの御心」

は「にくき」ものである、と指弾している。

最後のDも、B・Cと同じく、結婚に関わるものである。みずから東宮の位を退き、小一条院の院号を与えられた敦明親王は、道長女提子と結婚し、女婿として道長に厚遇されることとなったが、その一方で、早くからの妻である左大臣顕光女延子との仲は疎遠になつていった。ここでは、A・Cとは異なり、語り手による批評の草子地は付されていないが、次第に延子から隔たつてゆく小一条院の思いが、やはり「おとこの御心」ということばによつて表されている。

叙上のように、『栄花物語』に見られる四例の〈男の心〉は、いずれも結婚あるいは恋愛に関わる文脈において用いられており、また、それらの多くに「なをうきものはあれ」「いふかひなげなり」「にくきなるべし」といった、直截な非難のニュアンスが込められた否定的な批評の草子地が付されている点にも共通性が認められる。とひとまずは押さえておくことができよう。

これらの〈男の心〉に相通じる表現性を有するものとして、『栄花物語』には、次のような〈人の心〉という連語も見出される。

Eむすめの、あるがなかにいみじうかしづきおもひたりけるを、  
「おとこあはせん」などおもひけれど、人のこゝろのしりがたう、あやうかりければ、……

（巻第三「さまざまのよろこび」①一四二頁）

Fさ様のたぐひにも、けしからぬ人ぐに思ひいふべかめれど、それあべき事にもあらず。なをいとむかしもいまも人の心ぞ心

うき物はあるや。

（巻第二十一「後くみの大將」②三八九・九〇頁）

Eは、娘の貴子の結婚について思案する高階成忠が、〈人の心〉の頼みがたさを危ぶんで結局宮仕えに出したというもの、またFは、藤原教通の際限のない好色ぶりを非難するものである。とりわけFは、仮に〈男の心〉とあつても文意にはほとんど変わりのないところであり、〈人の心〉と〈男の心〉との間に一定の互換性があることがうかがわれる。また、Eは直前に「おとこあはせん」とあるので、〈男〉の重複を避けて「人のこゝろ」とした可能性も想定されるが、意味としてはやはり〈男の心〉とほぼ同様である。ただし、〈人の心〉の場合は、〈男の心〉とは異なり、全一三例（正編一〇例・続編三例）のうち、男女関係に関わる文脈で用いられているのは、わずかにE・Fの二例に過ぎない。

この〈人の心〉という表現をめぐっては、『蜻蛉日記』が兼家の〈心〉を表すものとして特徴的に用いていることが、吉田幹生氏によつて指摘されている。<sup>16</sup>『蜻蛉日記』の〈人の心〉も、『栄花物語』の〈男の心〉も、〈男〉への不信感をア・プリアリに前提としている点では同様であるが、あくまでも作者道綱母と夫兼家との一对の夫婦関係を主題としている『蜻蛉日記』においては、〈人の心〉の〈人〉が指しているのは、常に兼家という具体的かつ個別的な人物であつて、それが〈人〉一般へと敷衍されてゆくことはない。それに対して、『栄花物語』は〈人〉をより明確に〈男〉という性に限定することを明示した上で、〈男〉一般に対する不信感を表出して

いるのである。

### 三 〈男の心〉の表現史

続いて、やや迂遠な手続きながら、『栄花物語』の以前以後の平安文学史において、「男の心」ということばがどのように用いられているのか、その表現史をたどり見ておくことにしたい。前述のように、平安時代の物語文学には、「男の心」という連語の用例はほとんど見られず、日記など物語以外の仮名散文テクストにまで検索の対象を広げてみても、管見の限りでは、次の四例を見出しうるのみである。<sup>17)</sup>

G いせの宮すん所、おとこのこ、ろにて、

かげとのみ水のしたにてあひみれどたまなきからはかひなかりけり  
〔大和物語〕一四七段<sup>18)</sup>

H 「なにごと(に)よりも(てカ)、いかにおもほしてありつるぞ」と(忠雅が)きこえ給へば、(正頼の六の君⇨忠雅の北の方)は「かゝることをなんき、し」か(なカ)どもきこえ給はず、「朱雀帝の女三の宮は)世中にの、しりいで給宮なれば、おとこの御心といふ物ねたくとも」とおぼして、おとゞ(正頼)のとゞめ給へるやうにきこえ給ふ。

I おとこの心、はたしらず、(大納言が)「中の君を)みたてまつらばや」とおほしもやすらん。  
〔夜の寢覚〕卷二<sup>20)</sup>

J 「たゞ、男のこ、ろはかほる大将、かばねたづぬる三宮ばかり

こそ、あはれにめやすき御こ、ろなめれ」と、からうじておもふたまへつれど、「おとこもおんなも、こ、ろふかきことは、このものがたりにはべる」とぞ、本に。  
〔狭衣物語〕卷四<sup>21)</sup>

もつとも、Gの『大和物語』の例は、「(生田川伝説の)男の氣持」になつて」という、『栄花物語』の「男の心」とはおよそ異なる意味で用いられており、そもそも連語として認めうるか否かについても疑問が残る。また、Jの『狭衣物語』の例は、確かに「男」一般の「心」を組上りにのぼせてはいるものの、周知のように『狭衣物語』は本文異同が著しく、この用例を含む文章じたいを持たない伝本も少なくない。わずかにHの『うつほ物語』とIの『夜の寢覚』の二例のみが、美貌の女性に関心を寄せずにはいられない「男」一般の性とでもいふべきものを言い表している点で、『栄花物語』の「男の心」に通じている、と評しえようか。

右のように、『栄花物語』以外の平安時代の仮名散文テクストにおいては、「男の心」にことさらに焦点が当てられることはなかった、と見るよりほかないが、歌集の詞書に目を向けてみると、事情はいささか異なってくる。歌そのものに「男の心」ということばが用いられた例は見られないが、平安時代の歌集の詞書には、以下のごとく、七例の「男の心」の用例が見出される。

K をとこの心やうやうかれがたに見えゆきければ

〔後撰集〕恋三・七四九<sup>22)</sup>

L まもりおきて侍りけるをとこの心かはりにければ、そのまもりを返しやるとて  
〔後撰集〕恋三・七六一

Mをとこの心つらく思ひかれにけるを、女なほざりに「などかおともせぬ」といひつかはしたりければ

〔後撰集〕恋三・七八〇

Nをとこの心かはるけしきなりければ、ただなりける時、このをとこの心ざせりける扇にかきつけて侍りける

〔後撰集〕恋五・九三四

Oをとこのもとにむかへたるに、ことをひかするに、をんなとだえたれば、おとこの心もかはりたるやうにみえしかば

〔小馬命婦集〕四五<sup>(23)</sup>

Pおとこの心といふもの、つよくありしもせよめづらしく、はつかなるにこゝろざしをつくし、いひそむるなざけのことば、たをやかなるみやびには、なにをかすべきとて、

〔賀茂保憲女集〕一

Qをとこにつきてちちうのくににまかりたりけるに、をとこのこころかはりてつねにはしたなめければ、みやこなるおやのもとへつかはしける

〔金葉集〕二度本、雑上・五九六 読人不知

ここで注目されるのは、右の七例のうち、Pの『賀茂保憲女集』を除いた六例が、〈男の心〉とは「離わかる」もの、あるいは「変はる」ものである、と述べていることである。なかでも『後撰集』『小馬命婦集』の例は、『茶花物語』成立以前の10世紀後半ごろまでには、〈男の心〉は移ろいやすいものである、という認識がすでに定着し、それが文学テキストにおいても表出されるようになっていた

ことを証するものであるといえよう。吉田幹生氏は、『蜻蛉日記』において「実際の愛情がどうであるという以前に、男への不信任感が既に刷り込まれている」ことを指摘しているが、<sup>(24)</sup>『蜻蛉日記』もまた10世紀後半の成立であり、『蜻蛉日記』が先験的な「男への不信任感」をあらわにした時期は、『後撰集』や『小馬命婦集』が〈男の心〉を「離る」もの、「変はる」ものとして取り上げた時期とも重なっている。

なお、前掲のK、Qの七例のうち、四例までが『後撰集』に集中していることも注目されるが、これについては、褻の歌集であり、男女の日常的な恋の贈答歌を数多く収めている『後撰集』なればこそ、おのずと〈男の心〉に着目することにもなったのではないかと考えておきたい。事実、〈男の心〉の用例はすべて恋部に見られるものであり、このことも右の推測の傍証となろう。

また、恋愛における〈男〉の一般的な傾向をいう表現として、〈男の心〉のほかに、〈男の好き〉<sup>(25)</sup>〈男子の好き〉<sup>(26)</sup>という連語も存し、〈男の心〉と同じく用例は乏少なから、以下のごとく、『うつほ物語』と『夜の寝覚』とに用例が見られる。

Rをこののすきといふ物は、あやしき物にはべりければ、おほけなき心の侍て、身をもほろぼして侍にこそあれ。

〔うつほ物語〕「国譲下」

Sおのこのすきは、さぞあるや。「女ある(り力)」ときけば、天下の仙人もさ<sup>(27)</sup>めならざめればにこそ。

〔うつほ物語〕「国譲下」

丁心しりなるあやまちすら、おのこのすきは、さこそ侍れ、ましてこは、ふかきとがあるべきことならねば、たゞあながちにいみじき事に侍るめるが、女のためには、げにいといとをしき事に侍れば、きかせてまつり侍らず。〔夜の寢覚〕巻一〕

これらの表現は〈男の心〉に近似するものではあるが、「を」と「を」の差異も看過しがたく、何より〈好き〉という具体的な性向を直接に指している点において、より幅広く〈心〉そのものを焦点化している『栄花物語』の〈男の心〉との表現上の位相差は、けっして小さくはないであろう。

#### 四 〈男〉と〈男の心〉へのまなざし

ここでは、再び『栄花物語』に立ち戻り、前掲の〈男の心〉の用例A～Dについて、あらためて仔細に検討を加えてゆく。

『栄花物語』における〈男の心〉について考える前提として確認しておきたいのは、Aでは村上天皇、Bでは藤原隆家、Cでは藤原頼通、そしてDでは小一条院(敦明親王)と、名だたる貴顕たちが〈男〉と名指されていることの意味である。この〈男〉という呼称をめぐっては、『源氏物語』を主たる対象とした先行研究の蓄積が存在する。屏風歌の詞書や歌物語における〈男〉〈女〉の呼称にも着目しつつ、男女の恋の場面では、身分や社会的地位を問わず、いかなる人物も〈男〉〈女〉と呼ばれうることを先駆的に指摘したのは、玉上琢彌氏であった。この玉上氏説は、その後、清水好子氏・神作光一氏らによって発展的に継承され、ほぼ通説化して現在に至って

いる。

『源氏物語』以外の物語については、こうした〈男〉〈女〉の呼称の問題が注目されることは、これまであまりなかったようであるが、前掲A～Dから推す限り、『栄花物語』の〈男の心〉の〈男〉も、『源氏物語』の場合と同様に、男女の恋愛関係あるいは夫婦関係における、〈女〉に対する一方の当事者であることを意識した表現であると見てよいであろう。『栄花物語』正編が『源氏物語』と同じく、彰子の文化圏において制作され、その影響を強く受けていることも、〈男〉〈女〉の呼称をめぐる表現の共通性の一因としてあったものと推察される。村上天皇をはじめとする貴顕たちも、それぞれの場面において、〈女〉と向き合う一人の〈男〉として据え直され、その〈心〉のありようが問われてゆくことになるのである。ただし、編年的な通史への志向を持つ『栄花物語』は、作り物語のように、個々の〈男〉たちの〈心〉を継続的に深く掘り下げてゆくという方向へは向かわない。むしろ、彼らの個別的な〈心〉の問題を起点としつつも、そこから敷衍して〈男の心〉一般について述べようとするのが、『栄花物語』の特徴であるものと思量される。

右のような〈男の心〉の表現性は、近世から現代に至る『栄花物語』注釈史の中では、ほぼ等閑に付されてきたが、近時、『新編日本古典文学全集』は、Aについて「女性の立場に立った、男性不信の表白」「『栄花』の作者として女性が想定される有力な根拠の一つ」と評しているのをはじめ、Bには「男性の不実を批判する草子地」、Cにも「頼通が異例といえるほど隆姫を愛しているにもかか

わらず、やはりそれだけで取まらない気持も持っていることを指しての語り手の評言」と注記し、こうした表現が繰り返されていることについて注意を促しており、これらの指摘はおおむね首肯される。ただし、〈男の心〉への不信感の表出を女性作者説の「有力な根拠」とするのは、必ずしも『新全集』独自の説ではなく、その淵源は、岡本保孝『栄花物語抄』の、Cに対する「男の心のあだなるをいふ。此物語、女のかける一証となるべし」という注記にまで遡りうる。むしろ、「男性の不実」に対する不信感をあらわにしているがゆえに、作者は女性である、と性急に断じることには慎重でなければなるまいが、「おとこの御こゝろこそなをうきものはあれ」「をとこの御心のにくきなるべし」といった物言いは、確かに「女性の立場」から発せられているものと見て差し支えないであろう。

また、既述のように、『栄花物語』には、個々の具体的な〈男の心〉の〈心〉に焦点を当てながらも、それをより一般的かつ普遍的な〈男の心〉の問題へと敷衍してゆこうとする傾向が認められるが、そのことをはじめて指摘したのは、与謝野晶子の、Cについての「妻を思ふことの深いこの人でも、男の通有性である多感な所はあるのである」（『新訳栄華物語』中巻「玉のむら菊」<sup>30</sup>）という解釈である。『栄花物語』が「多感な所」を頼通個人の問題とはみなさず、〈男〉一般についての「通有性」を有する問題として捉えようとしていることを看破した点はきわめて重要であり、この「通有性」という語は、後続の『日本古典全書』『日本古典文学大系』『栄花物語全注釈』などにも踏襲されている。

さらに注目されるのは、『栄花物語』と同じく前掲K～Nの四例の〈男の心〉の用例を含む『後撰集』が、〈男の心〉は「離る」もの、「変はる」ものである、という認識を明確に示しながらも、取り立ててそのことを批判してはいなかったのに対して、『栄花物語』はA～Cに見られるごとく、「憂し」「言ふかひなげなり」「憎し」と、相当に直接的な、強いことばで指摘している、という事実である。加藤静子氏は、『栄花物語』を「女房文学としての系譜に連なる作品」「女性たちの協力によって女性たちのために記した歴史叙述の書」と評しているが、そうした『栄花物語』の性格は、歴史とは直接には関わらない恋愛の問題をめぐっても、このようなかたちで如実に表れている、と見ることができよう。『栄花物語』の厳しい〈男の心〉観は、貴顕たちの恋愛——それが正式な婚姻に発展することはむしろ少なく、召人としての待遇に終わることも多かったであろう——の対象でもあった女房たちの、生々しい実感を反映したものであったともみなしうる。

とはいえ、『栄花物語』は、前述のごとく『後撰集』の時代にはほぼ共有されていたものと思しい、〈男の心〉は移ろいやすいものである、という認識に無批判に便乗し、それに基づいて個々の〈男〉たちの〈心〉を非難しているのではない。前掲の『新全集』がCについて「頼通が異例といえるほど隆姫を愛しているにもかかわらず、やはりそれだけで取まらない気持も持っている」（傍点筆者）と述べていたことと同様の事情は、A・B・Dからも窺知される。すなわち、Aでは、村上天皇は亡き安子の死を「まごゝろにな

げきすぐさせ」ていたにもかかわらず、その同母妹である登子への懸想を抑えかね、Bでは、舅の重信が手厚くもてなしているにもかかわらず、隆家は景斉女を寵愛して重信女を顧みず、Dでは、小一条院は延子を「をろかならず」思っていたにもかかわらず、道長女提子との結婚後は次第に疎遠になってゆく、といった具合に、である。

もとより、『栄花物語』は〈男の心〉の移ろいややさそれじたいについても、けっして快く思っているわけではないであろう。だが、右のことから知られるように、『栄花物語』がことさらに批判しているのは、そのことではない。本来愛情を注ぐべき（であると語り手が考える）女性がありながら、別の女性に対する関心や恋慕を抑制しえない、そうしたあやにくな〈男の心〉のありようをこそ、『栄花物語』は「愛し」「憎し」と難じたり、「言ふかひなげなり」と突き放してみせたりもするのである。

このような〈男の心〉への辛辣なまなざしと、直截で手厳しい批判のことは、本稿で検証してきたように、『栄花物語』以外の平安文学には見られないものであり、『栄花物語』の恋愛文学としての奥行きを深さを示すものといえよう。かくも徹底して女性——女房の立場に寄り添い、〈男の心〉を批判的に問う〈女〉の視座から恋愛を捉えていることは、『栄花物語』が単に仮名文の歴史叙述であるにとどまらず、恋愛文学として、また女性文学としての豊かな可能性を内包していることを証し立てているのである。

注1 松村博司「歴史物語」（改訂版）——栄花物語・四鏡とその流れ——、塙書房、一九七九年。旧版一九六二年 参照。

2 拙論「仮名文で歴史を「書く」ということ——『栄花物語』論のための序章——」（古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考』二七、新典社、二〇一二年）参照。

3 このことについては、加藤静子「序にかえて」（『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎、二〇一一年）の「編年体構造のなかに、作り物語、女房日記や家集とさまざまな表現手段が渾然と生かされている」という指摘を踏まえつつ、拙論「ジャンルと時代を越えてゆくこと——『栄花物語』と『歴史物語』を例として——」（『中古文学』一〇〇、中古文学会、二〇一七年一月）でも言及した。

4 恋愛文学という視座から古代文学を論じた最近の成果として、吉田幹生「日本古代恋愛文学史」（笠間書院、二〇一五年）があり、本稿も多大な示唆を得た。吉田氏には、統稿として「恋愛——愛情か友情か——文学アプローチ——」（成蹊大学文学部学芸編『データで読む日本文化——高校生からの文学・社会学・メディア研究入門——』（成蹊大学人文叢書）風間書房、二〇一五年）もある。

5 秋山虔「恋愛文学としての源氏物語」（『日本の美学』一一、ベリカ出版社、一九八七年一月）。

6 朝野祐吉「かなしくあはれな物語」（『日本古典全書』）（『栄花物語』三）朝日新聞社、一九五八年四月）。

7 加納重文「歴史物語の思想」（京都女子大学、一九九二年）第1編「栄花物語」第一章「性格」（初出一九七六年）。以下、単行本所収の論文で初出稿がある場合には、初出年を併記する。

8 『栄花物語』の引用は、川口久雄序・解説「梅沢本 栄花物語」（『古典資料類従』（勉誠社、一九七九・八二年）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとし、底本に補入されている文字は（ ）で括弧で示した。引用本文には、梅沢本を底本とする、山中裕・秋山虔・池田尚隆・福長進校注・訳「栄花物語」①、③（『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九五・九八年）の巻数・頁数

- を併記した。
- 9 横溝博『茶花物語』と平安朝物語の関係——『うつほ物語』の影響、成熟する歴史語り——（加藤静子・福長進編『日本文学研究ジャーナル』六、古典ライブラリー、二〇一八年六月）。
- 10 木村朗子『女たちの平安宮廷——『茶花物語』による権力と性』（講談社選書メチエ（講談社、二〇一五年）、九頁）。
- 11 益田勝実『大鏡——物語の鬼子としての——』（国文学 解釈と教材の研究）三一—三、学燈社、一九八六年一月）。
- 12 松村博司編『茶花物語の研究 校異篇』上・中・下・続（風間書房、一九八五—八八年）。
- 13 国文学研究資料館蔵（E七五六五）。
- 14 『新編日本古典文学全集』は、E・Fの〈人の心〉とともに「男の心」と現代語訳している。
- 15 本稿の論旨には関わらないが、『茶花物語』正編に見られる一〇例の〈人の心〉のうち、四例までが巻第二十七「ころものたま」における公任の出家をめぐる物語に集中して現れ、人心の移ろいやすさを嘆じる際に用いられていることは注意される。
- 16 吉田幹生「〈人の心〉から『我が心』へ——『蜻蛉日記』論——」（『日本古代恋愛文学史』（注）（4） 初出二〇〇四年）。
- 17 『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『篁物語』『多武峯少将物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『紫式部日記』『堤中納言物語』『浜松中納言物語』『更級日記』『大鏡』『讀史記』日記『今鏡』には、〈男の心〉の用例は見出しえない。
- 18 『大和物語』（前田家本）の引用は、池田亀鑑解説『大和物語』（尊経閣叢刊）（育徳財団、一九三六年）に拠り、適宜私に濁点・読点を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。
- 19 『うつほ物語』（前田家本）の引用は、室城秀之・西端幸雄・江戸英雄・稲貝直子・志甫由紀恵・中村一夫編『うつほ物語の総合研究Ⅰ 本文編』上・下（勉誠出版、一九九九年）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとし、底本にな
- い文字を補った場合は（ ）で括弧して示した。
- 20 『夜の寝覚』（松平文庫本）の引用は、大槻修・大槻節子校注『夜の寝覚』一—五（影印校注古典叢書）（新典社、一九七六—八三年）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。
- 21 『狭衣物語』（内閣文庫本）の引用は、国文学研究資料館蔵の紙焼写真（E二二三三八）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧を付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。
- 22 勅撰集の引用は、『新編国歌大観』（古典ライブラリー「日本文学Web図書館」）に拠り、適宜私に鍵括弧を付した。底本は、『後撰和歌集』は日本大学総合図書館蔵冷泉為相筆本、『金葉和歌集』（二度本）はノートルダム清心女子大学附属図書館蔵伝二条為明筆本。
- 23 私家集の引用は、『新編私家集大成』（古典ライブラリー「日本文学Web図書館」）に拠り、適宜私に濁点を付した。底本は、『小馬命婦集』は書陵部蔵伏見宮本、『賀茂保憲女集』は書陵部蔵「六女歌集」所載本。
- 24 注（16）吉田氏論文。
- 25 「を」と「をの」の差異について、滝澤貞夫「をのこ」（中田祝夫・和田利政・北原保雄編『古語大辞典』小学館、一九八三年）は、「平安時代、「を」と「をの」がもつばら夫（情夫）の意を表したのに対して、広く男性一般の意を指す語としての「をのこ」が生じた（吉澤義則）といわれる。こ」にやや見下げた語感が認められる以外に、さほどに意味上の違いは認めがたい」と説いている。（を」とこの心）の用例はあっても、（をのこ）の心）の用例が見出せないことも注意されよう。なお、『古語大辞典』が引く吉澤義則氏の説は、「を」と「をのこ」（『源語釈泉』誠和書院、一九五〇年。増補版、臨川書店、一九七三年）。
- 26 玉上琢彌「屏風絵と歌と物語と——源氏物語の本性（その三）——」（『源氏物語音読論』（岩波現代文庫）岩波書店、二〇〇三年。初出一九五三年）。
- 27 清水好子『源氏の女君』（三二書房、一九五九年。増補版、塙書房、一

- 九六七年)、神作光「源氏物語の男性像——「男」「男君」と呼ばれる場面をおししての一考察——」(山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座』四〈各巻と人物Ⅱ〉、有精堂出版、一九七一年)。また、〈男〉という呼称に関する最近の論稿として、麻生裕貴「呼称が描く夕霧の恋——「男」・「男君」・「女」・「女君」呼称をもとに——」(河添房江編『古代文学の时空』翰林書房、二〇一三年)がある。
- 28 拙論「藤原彰子とその時代——后と女房——」(助川幸逸郎・立石和弘・土方洋一・松岡智之編『新時代への源氏学4 制作空間の(紫式部)』竹林舎、二〇一七年)参照。
- 29 『栄花物語抄』の引用は、内閣文庫本を底本とする、室松岩雄編『国文註釈全書』七(國學院大學出版部、一九〇七年。復刻版、すみや書房、一九六八年)に拠り、適宜私に濁点・句読点を付した。
- 30 逸見久美編集代表『鉄幹晶子全集』一一(勉誠出版、二〇〇三年。原著一九一四年、二八九頁)。
- 31 注(3) 加藤氏論文。

(さくらい・ひろのり) 本学非常勤講師